

現地からの声 ～日々のパトロール編～

第3次ネパール国際平和協力隊員 永野宏明

UNMIN（ネパール）において軍事監視要員の勤務を始めて、早いもので半年が経ちました。現在私は、ネパール東南部にある勤務地（イラム）において副チームリーダーとして勤務をしています。

軍事監視要員の主要な勤務内容は、小銃等の武器が保管されたコンテナの監視と、マオイスト及びネパール国軍に対するパトロールです。このパトロールのために、車で片道1.5～2時間の距離を運転することが毎日の日課となっています。今回は、この日々のパトロールについて紹介したいと思います。

パトロールの日課は、毎週末に翌週のパトロール計画を作成することから始まります。

このパトロール計画作成は私の仕事であり、パトロールの予定を作るとともに、4人の軍事監視要員と3人のサポートフォースの勤務割りを決める重要な仕事です。この計画に基づき、マオイストとネパール国軍の各キャンプ地へのパトロールを実施します。

パトロールは7時半から出発準備、8時にパトロール先の駐屯地に向けて出発します。目的地に到着後、パトロール先のキャンプ地の状況確認、師団長又は旅団長等との会談、包括和平合意に違反した行動を取っていないかの確認をしてパトロールを終了します。「パトロール・軍事監視」と聞くと、何かすごい器材を使用していると思われるかもしれませんが、いたって普通の装備品を使用しています。車両は市販されている普通の乗用車（トヨタ・ランドクルーザープラドにUN塗装をした車両）服装は私服にUNジャケット・帽子を着用し、武器等も持たずにパトロールを実施しています。

道路周辺の風景は水牛・牛の放牧場や水田等、のどかな景色が続きます。ネパールと言えば「エベレスト」を連想されて、高地かつ積雪地をイメージされる方が多いと思いますが、ここイラムは標高200mの平地であり、雪とは無縁の熱帯性の気候です。ネパールの交通ルールは左側通行・右側ハンドルであり日本の交通ルールと酷似しており、また日本製の車両も多く見かけます。このため、あたかも日本の農道・田舎道を走っているような錯覚さえ起こします。

ほんの3年前まで、この地で武装紛争があり、多くの人が内戦に巻き込まれて死んでいった事が嘘のような美しい田園風景が続きます。途中何箇所かの町を通過す

るのですが、品数こそ少ないとは言え活気ある商店街を多く見かけます。また住民も貧しいとは言え笑顔であり、時に祭りや祝い事の際には音楽を鳴らしてダンスに興じたり、ごちそうを楽しんでいたりにしているのを見かけます。

そんな平和そのものの風景も、時折、武装闘争の傷跡という現実を思い起こさせる場面があります。それは、武装闘争で戦死した人たちの写真を掲示している追悼門や掲示板を見たり、武装闘争で犠牲になった話を聞いたりする時です。その時は、今見た・話した笑顔のネパール人の心の底にも、武装闘争の傷が残っているのだと強く思い知らされます。

実のところ、日々のパトロールは代わり映えしないため、自分の仕事の重要性をつい忘れてしまいそうになることがあるのですが、そんな時、この追悼門を見て、改めて平和の重みを感じ、自分の姿勢を正します。そして明日も、この代わり映えしない道を維持するために、パトロールにでかけます。



(追 悼 門)



(チームメンバー)